

特別講演

東京戦前郊外住宅地

— 込められた夢を訪ねて —

高見澤邦郎

(明治大学建築学科客員教授)

東京圏は3千万人を超える人口を擁し先進国最大の都市圏となった。が、明治維新直後は、50万人少々が住むまちを一步出ればそこは田園の風景。やがて東京の急成長が始まり、農村部は都市計画のないまま工場や住宅によって侵食され、「スプロールのまち」という日本的風景が広がるに至る。

スプロールの海にも、〈思い〉の込められた「島」が見え隠れしていなかったわけではない。大正期の桜新町にはデベロッパーの萌芽を、黒澤村からはRオーエンの見果てぬ夢を垣間見ることができよう。

本年度の第1回目は東京西南セクターを対象に、郊外に込められた意味（or意義）を解こうとの意図で、大正末から昭和初期にかけての計画開発を取り上げたい。黒澤村は別格に、成城学園や自由学園などの学園都市づくり、田園調布や常盤台などの電鉄系開発、井荻や玉川などの地主組合の開発が思い浮かぶ。その各々のルーツや実態から、街をつくることの意味と方法を考えるヒントが得られればと思う。

2009年6月2日(火) 18時～20時

会場：明治大学生田キャンパス A館2階 A207教室

参加費：無料

問合せ先：明治大学山本研究室 片桐 (044-934-7390)



黒澤村の幼稚園 / これはもうニューラナーケ (1825年頃) だ